

ピリピ人への手紙1章19-30節 「生きるにしても、死ぬにしても」

1A あがめられるキリスト 19-26

1B 大胆なキリスト宣教 19-20

2B キリストと共にいる願い 21-23

3B 人々の信仰と喜び 24-26

2A 心一つにした戦い 27-30

1B 御国の市民 27-28

2B 苦しみの共有 29-30

本文

ピリピ人への手紙1章を開いてください。前回、パウロは、自分が牢に入っていることが、かえって福音の前進に役立ったことを伝えていました。それは、彼が親衛隊のローマ兵に鎖でつながれているのですが、彼らに福音を語っていたために彼らがキリスト者となっていったということです。それで、ローマやその周辺にいる人々にその話が伝わり、おそらく困難の中にあって、福音宣教に力が入らなくなっていた兄弟たちを力づけ、大胆にみことばを語るようになりました。困難の中にいると、私たちは意気消沈し、またはその困難から抜け出すことばかりを願います。しかし、その苦しみの中にこそ、神が何かみこころにしておられることがあり、私たちは思い煩いから自由にされて、そのみこころを見分けて、ひたすらみこころを行っていくことを喜びとします。

パウロがすごいと思ったのは、自分に妬みを覚えて、自分を貶めようとしている人々に対する態度です。パウロの宣べ伝える恵みの福音に対して、妬みを抱き、自分たちに引き寄せるためにパウロを引き落としながら、自分たちの存在を大きく見せる人々がいました。けれども、パウロは、そうやってキリストが宣べ伝えられているのであれば、それを喜びましようと言ったのです。ここまで、自分のことから自由にされているのを見ると、すごいと思います。人間の世界では、あえて嫌がれ訳を買うことにより、注目を集めて、自分の主張を広げていくということがありますね。反対する人がいるからこそ、人々がもっとそのことに関心を寄せて、それで初めてその話に耳を傾けます。

キリストにあって、パウロはそのことを確信していたのでした。つまり、自分の名誉が傷つけられても、キリストの名があがめられるようになるのであれば、それが本望である、という立場です。

1A あがめられるキリスト 19-26

優先順位がはっきりしている人は、幸いです。何が第一であり、他にも大切なことがあるけれども、第一のものを第一にしていることが識別できている人は幸いです。神の国と神の義をまず第一に求めるからこそ、その他の必要は加えて与えられます。パウロが、ピリピの人たちのことで祈

っていましたね、「1:9 あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、大切なことを見分けることができますように。」パウロが、いかに優先順位がはつきりしていたかが分かります。それは、キリストがあがめられる、という目標です。

1B 大胆なキリスト宣教 19-20

¹⁹ というのは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の支えによって、私が切に期待し望んでいるとおりに、このことが結局は私の救いとなることを知っているからです。

「このこと」とは、17 節の「あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでいきます」ということです。パウロがここで話している「救い」とは、前回も学びましたが、キリストにあって神の意図しているとおりに、被造物が回復するということです。自分が、神の救いのご計画全体の中に入っていることが、救いになっています。キリストが宣べ伝えられているのは、そのまま神の御国が、靈的に広がっているということですから、そのことを喜ぶことによって、自分自身が神の救いのご計画の中に留まっていることに他なりません。自分の喜びの置きどころを、どこにするか？が問われるのです。

そして、この中に留まっていることが、「あなたがたの祈り」の支えで行われることです。パウロが、キリストを宣べ伝えることについて、またキリストがあがめられることに留まっているのは、第一にピリピの人たちの祈りに支えられているのだということです。パウロは、エペソの人々にも具体的に祈りの願いをしていましたね。「エペ 6:20 私はこの福音のために、鎖につながれながらも使節の務めを果たしています。宣べ伝える際、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」

このことをもって、みなさんに強くお願いします。私のために、祈ってください。これは、付け足しではなく、むしろ、キリストを宣べ伝えるための、命の生命線なのだということです。そして互いに祈ってください。自分がキリストを宣べ伝える、行いや言葉において、自分によってキリストがあがめられることがどれだけ、互いの祈りによっているかが分かるでしょう。どうしても、祈りは横に追いやられてしまいます。礼拝を献げる人々は大勢いても、祈り会に集う人々が極端に少ないというのは、教会の現実です。しかし、祈りは礼拝やその他の奉仕における発電機であるということです。

そして、「イエス・キリストの御霊の支え」とあります。単に御霊と言わず、イエス・キリストの御霊の支えと言っています。なぜなら、御霊はキリストご自身を証しする方であり、御霊とキリストは同じ性質を持っておられるからです。「ヨハ 16:14 御霊はわたしの栄光を現されます。わたしのものを受けて、あなたがたに伝えてくださるのです。」

²⁰ 私の願いは、どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り、生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです。

19 節の、パウロが期待して望んでいることは、第一に、大胆にこれからも語っていくことができるようにする、ということです。「恥じることなく」と言っていますが、裏切られて失望するというような意味合いだからです。イエス様が死なれた後の弟子たちが、それです。メシアであると信じて、期待してついでに、十字架につけられました。それで落胆して、弟子二人がエルサレムから離れて、エマオの村に向かっていました。弟子たちは、自分たちの部屋の戸を、ユダヤ人を恐れて閉じていました。けれども、主はよみがえられましたね。その期待は裏切られず、希望は実体ともなったものなのです。

つまり、福音を恥じるということは、自分が信じて宣べ伝えている福音には、自分を救う力があるといっても、それは口だけのことで、裏切られ、失望するに決まっていると知っていることです。この日本において、福音を語っても、福音の中に生きようとしても、なんら影響力を与えているように思えないと感じるので、それでいつの間にか、福音を恥とするようになっていきます。心の中のペンダントのように、内に秘めておいて、外に出すものではない、外では周りに合わせて生きていこうと考えるのです。しかし、パウロの切なる願いは、恥じることがないようにすることでした。

彼が願っていること、切に期待していることは、第二に、「私の身によってキリストがあがめられる」ということです。これが、神の救いのご計画に、大きな部分を占めています。自分の周囲にいる人々は、キリストは、遠い昔の遠くの国で起こったことにいた人なのだと思います。自分の生活圏に関わるような人では全くないし、ましてや自分の人生を献げるような対象では決してないわけですから、私たち召された者たち一人一人が、ここにいる理由があるのです。自分の生きていることによって、キリストがあがめられるのです。自分がいることによって、周りの人々の心に渇きが起こって、この人が言っているイエスという者が、何かを持っているのか？と思わせる何かがある、ということです。

ですから、自分が苦しみから解かれることが単に目的ではないことが、よくわかるでしょう。もちろん、苦しみの中に居続けることが目的でもありません。「苦しみ」が、その場合、注目するところになってしまっているのです。苦しみが、いわば、あがめられているのです。そうではなく、苦しんでいようが、そうでなかろうが、その過程にあってキリストが、自分の身によってあがめられるということなのです。

それが、自分の生きていることによって果たされるのであれば、それでいいし、自分が死ぬことによって果たされるのであれば、それでもいいのだ、というのが、ここでパウロが、「生きるにしても死ぬにしても」と言っているところです。私の友人に、三歳で、心筋症で天に召された子がいます。彼は、すでにイエス様を信じていました。彼の最後は、チューブにつながれていて、親でさえが彼を抱くことができませんでした。しかし、延命措置をやめにするかどうか医者から尋ねられた時に、本人に聞いたそうです。「イエス様のところに生きたいか。」彼は、うなずきました。それでチューブ

を外し、親は彼がこの体から自由にされたことを、彼の体を抱きながら神に感謝して捧げました。そこで、その母親が葬儀の時にこう言ったのです。彼の名はカレブと言いますが、「カレブがベットの上でチューブでつながれている時に、イエス様が十字架に付けられているのと重なりました。」イエス様を信じたカレブ君は、死ぬ時にしっかりと、キリストがあがめられていたのです。

2B キリストと共にいる願い 21-23

²¹ 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。

午前礼拝で、ここを詳しく説き明かしたので、ぜひ後で聞いてください。この言葉を、パウロは、重みをもって語っています。彼は皇帝の前で裁判を受けるために、ローマで牢にいます。だから、ややもすると、彼は死刑に処せられることも考えられたわけです。けれども、彼は死ぬことも益だと大胆に宣言します。

²² しかし、肉体において生きることが続いたら、私の働きが実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。²³ 私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。

いわゆる、今の言葉でいうならば、「ウイン・ウイン」の関係です。死ぬにしても、生きるにしても、どちらにしても、素晴らしいことだということです。この肉体が生かされるのであれば、それは、自分の働きによって、神のことばが広がり、人々がキリストのものになっていく実が結ばれるのであるから、それは素晴らしいということです。そして死ぬことは、主と共にいることになるから、はるかに望ましいのだと言っています。

彼にとって、自分に妬みをもっているか、愛をもって宣べ伝えるかは、大きな問題になっていませんでした。それどころか、生きることと死ぬという、これ以上に大事なこと、大きなことはないと思われませんが、それさえも大きな問題になっていなかったのです。キリストがあがめられることが第一となっているので、他の大事だと思われることで思い煩うことが少なくなっているのです。

「世を去ってキリストとともにいる」という言葉は、大事です。ここの「去る」とは、いろいろな意味があります。兵士に使われる時は、「テントをたたんで、前進しろ。」という時に使われます。私たちの肉体という天幕は取り去られて、神のくださる家を私たちはいただきます。復活のからだです。ペテロは、皇帝ネロによって死刑になることが分かっていた時に、「Ⅱペテロ 2:14 私たちの主イエス・キリストが示してくださったように、私はこの幕屋を間もなく脱ぎ捨てることを知っています。」幕屋を脱ぎ捨てるのです。そして、脱ぎ捨てるのは裸になるためではなく、新たに着るためです。「Ⅱコリ 5:1-3 たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。私たちはこの幕屋にあ

ってうめき、天から与えられる住まいを着たいと切望しています。その幕屋を脱いだとしても、私たちは裸の状態にいることはありません。」

このようにして、天においては主と共にいます。ある人々は、死んだら意識がなくなるといいます。主ご自身も使徒たちも、「眠っている人々」という表現をしていて、それを文字通りに解釈します。これが間違っているのは、イエス様が、ラザロについて眠っているとされたけれども、弟子たちが文字通りに解釈して、眠っているだけなら大丈夫だろうと言ったのに対して、「ラザロは死んだのです」と、はっきり言われたところから分かります。死んだら、意識がなくなるのではありません。そうではなく、そのまま主と共にいるのです。ある伝道者は、「あなたの死の床の最後の息の次は、天において、主のおられるところで息をする。」

3B 人々の信仰と喜び 24-26

²⁴ しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためにはもっと必要です。²⁵ このことを確信しているので、あなたがたの信仰の前進と喜びのために、私が生きながらえて、あなたがたすべてとともにいるようになることを知っています。

パウロは、何らかの形で、御霊によってでしょうか、法廷において彼は釈放されるのではないかと示されたようです。「このことを確信しているので」と言っています。今のところ主に生きることが示されているということでしょう。そして、釈放後にピリピの人々のところに行ける確信を得ています。「信仰の前進と喜び」と言っていますが、ローマにおける福音の進歩だけでなく、ピリピにおける、信者の中におけるパウロの喜びの共有が起こる、ということです。パウロに与えられた主にある喜び、その信仰によって見えている幻、それらを彼らも共有して、彼らの信仰も進歩するということです。

²⁶ そうなれば、私は再びあなたがたのもとに行けるので、私に関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあって増し加わるでしょう。

ピリピの人たちは、パウロの働きに贈り物によって支えていましたが、そこでパウロがピリピに顔を出せば、彼らが、神の国が確かにパウロの働きを通して広がっていることを確認することができ、それで自分たちのしていることが、無駄に終わっていない、これはみこころなのだという思いが増し加わるでしょう。そういったことが、「私に関するあなたがたの誇り」ということです。何か威張っていることではなく、主が行われていることなのだを確認することでもあります。

2A 心一つにした戦い 27-30

そして、次、27 節からパウロは、ピリピの教会で起こっている問題に触れていきます。彼は、このように主にあって喜んでいますが、その主の喜びを奪い取ってしまうようなことが起こっていたので

す。それが、指導者間にある対立です。教会に一致が揺らいでいたのです。エペソ人への学びで、教会がキリストのからだであることを私たちは学びましたが、一つになっているということが、御霊によっていかに保っていくべきなのか、その知識と識別力をピリピ書では見ていくことができます。

1B 御国の市民 27-28

^{27a} ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたについて、こう聞くことができますでしょう。

ここの「ただ」というのは、「もっぱら」という意味です。新共同訳では「ひたすら」と訳されています。そして、「キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」とありますが、これは意識で、引照のところにある「市民として生活しなさい」というのが、もっと直訳的です。ここが、「πολιτεύομαι」というギリシア語が使われており、ギリシアの都市「ポリス πόλις」に基づいています。英語で「政治」を「ポリテイクス」といいますが、このギリシア語から来ています。ポリスは都市であっても、それ自体で国家と同じ単位になっている、つまり都市国家ということです。今でいうなら、シンガポールとかドバイとか、都市であり国であるところですよ。ですから、「神の国の市民として、ひたすら生活しなさい」という意味になっています。

これは、かなり能動的、積極果敢な言葉です。ギリシア人にとって、「ポリス」とは単なる国のことではありませんでした。映画で、スパルタ人の勇猛な戦いを描いた「300(スリーハンドレッド)」をご覧になったことがある方は、すぐにわかると思います。強烈な忠誠心と誇りが、そこにはあります。日本では愛国心というと、どうも敬遠されがちですが、分かりやすく言うなら、自分がスポーツ選手で、そのチームのメンバーとしてひたすら生活しなさい、という意味になると思います。あるいは、会社勤めの人たちの、会社に対する忠誠心です。スポーツであれば賞を得るために、自分のすべてを犠牲にします。会社でも、その会社の榮譽のために、最高のサービスを顧客に提供しようとしています。日本における客へのサービスは、おそらく世界一でしょう。

大事なものは、そういった犠牲が自主的だということです。運動選手がその苛酷な練習を、強制的にされるのであれば人権侵害ものです。しかし、彼はそれを選んで訓練を受けています。ですから、忠誠を誓い、それを自ら選んで行なっているのです。愛ゆえに献身しています。

パウロはこのポリスという言葉で、キリスト者に当てはめているのです。キリスト者が、御国の市民であるということです。そして、キリストがご自分の命を捨て、血を流してくださったことにより、その愛を受けて、感謝が溢れ流れ、この方を愛して、忠誠を誓う、つまりイエスを主とする教会に属していることを表明しています。

そして、この「ポリス」という言葉を、パウロがピリピという町の信者に対して使ったということは、

とても大事です。ピリピはローマの植民都市でした。ピリピ人たちは、自分たちがローマ人であることを誇りにしていました。したがって、パウロたちがピリピで受けた迫害というのは、そうしたローマの誇りからだったのです。(使徒 16:20-21 参照)ですから、誇り高き市民文化がある中で、パウロは天を国籍とする市民文化の中で生きなさいとピリピ人への手紙は勧めたのです。「3:20 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。」ピリピの人たちがローマに市民権があることを誇りとしているように、天において国籍があるのだと宣言しているのです。

そこで必要なことは「責任関係」です。御国の市民であるということは、互いに仲間であり、共に戦っている仲なのだとということです。主に対して忠誠を保ち、主にある者たちにも忠誠心を保つことです。自分にそれがあるかどうかを知ることのできる方法は、とても簡単です。「どこの教会ですか」と人から尋ねられた時に、間髪入れずに、すぐに答えられるか？ということです。また、その教会の牧師や、だれかに連絡しても、「確かに、この人は私たちの教会の人たちです。」とってもらえるほど、自分が知られていることが必要です。それだけ、教会としての時間を共有しているのです。教会としての苦楽を共にしているのです。共有しているからこそ、知られているのです。

パウロは、ここで「私が行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。」と言いました。パウロが見て、聞いて、ピリピの教会についてはこうだと自信をもって言うことができるようにする仲であります。つまり、「私は見ている」という説明責任のある仲です。ちょうど、スポーツのチームに監督がいるのと同じように、教会にも監督がいます。先ほど、「どの教会ですか」と聞かれて、すぐに答えることのできる場所にいるか、という話をしました。だから、「あなたの牧師は誰ですか。」と尋ねられて、「この人です」と言える仲にあるか、ということです。「なんで、自由にしているのに監督されないといけないの？監視みたい。されなければいけないのですか。」と感じる人は、チームで戦っている時に監督は要らない、監視されるから、と言っているのに等しいです。

ですから、私たちは天の御国に属する市民であります。そこで、地上の生活に激しくぶつかるものがたくさんあります。そこで、私たちは次に出てくる、「ともに戦う」という要素が大きくなります。

^{27b} あなたがたは霊を一つにして堅く立ち、福音の信仰のために心を一つにしてともに戦っていて、

「霊を一つにして堅く立ち」と言っていますが、その後、「心(あるいは思い)を一つにして」戦っていると書いていることが大事です。私たちが、何か規則を作って、それでそれに従って動くのであれば、一緒に動いているかもしれませんが、心が伴っていません。神は御霊を教会に与え、それぞれの思いがいつの間にか一つになっているという働きを行ってください。私たちのすることはみな、上から聖霊に注がれて、そして初めて一致を共有することができます。

そして、先ほどから言っていますように、この「戦い」は、戦争また競技に使われる言葉です。ですから、キリスト者としての歩みは、個人プレーではなく団体プレーであること。独り戦ではなく、部隊における戦であることを知るべきでしょう。キリストへの信仰を持つことによって、家庭や職場で、教会外で軋轢ができます。互いにそのような状況があります。

ここからが問題です。もし私たちが教会の中で、自分自身を求めていたのであれば、教会の外で傷ついてきているのに、心ない言葉によってさらに追い打ちをかけられてしまう、ということです。これが、おそらくピリピの教会の中で起こったことでしょう。みなが苦しみの中にありました。ですから、一つになって互いを守り、互いのために信仰の盾を取り、共に戦わなければいけないのに、自分自身で自分を守らなければいけないと思ひ込み、教会ですぐそばにいる仲間に関心をもちません。そして、自分の都合を優先させます。互いに互いを必要としているのに、自分のことで精一杯なのです。戦いの仲間なのに、共に戦わないのです。これが、個人プレーが「百害あって一利なし」の根拠です。自分独りで戦っていると思ひ込んでいるから、仲間であるはずの人間に、むしろ自己防衛してしまうのです。ひどければ敵対的になってしまうのです。

ペテロとヨハネが、ユダヤ人の最高法院に連れ行かれた時のことを思い出してください。彼らは、イエスの名によって今後語ってはいけないと脅されて釈放されました。そして、こう書いてあります。「使 4:23-24 さて、釈放された二人は仲間のところに行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。24a これを聞いた人々は心を一つにして、神に向かって声をあげた。」ペテロとヨハネは、残らず報告しています。そして、聞いた人々はみな、心を一つにして神に向かって声を上げています。この後に、「集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語り出した。(4:31)」とあります。これが、「福音の信仰のために心を一つにしてともに戦って」いるということです。

この前、学びましたように、エペソ 6 章にある霊の戦いの武具ですが、ローマ兵が実際に戦闘に出ていく時は、隊形を組むことがほとんどです。独り戦など、存在しません。敵陣に近づく時に、テストドと呼ばれる、亀の甲羅のかたちを盾で作りだし、少しずつ前進します。ちょうど戦車が敵陣に近づけるところまで近づいて、それから歩兵が乗り込んでいくのと同じように、自分たちで互いに互いを守りながら、前に進んでいきます。

私たちは、聖書が最高権威だとする宗教改革の精神を受け継ぐ、プロテスタントの伝統の中に生きています。そして聖書は、誤りなき神のことばだと信じる信仰を持っています。それゆえ、聖書を自分自身で読んで、神の言葉として受けとる習慣がしっかりと身に着いています。これは、良いことです。これが悪いでは決してありません。もっともっと、しっかりとやっていくべきです。しかし、問題は、その中で「神と私だけ」という個人主義に陥ることです。それで、自分は信仰を持っているけれども、教会に行けないという人々があまりにもたくさんいます。

けれども、自分は同時に、互いが互いを必要とする、キリストのからだに召されたのです。だから、自分は他の人が必要だからということで、SNSなどを頼りにしています。でもSNSではなくて、自分の身体を持って行って、互いに心を開いて、祈り合い、助け合い、仕え合い、愛し合えばよいのです。教会が、信仰に付け足されるものではなく、かくも一体になっているものであることをよく知ってください。

²⁸ どんなことがあっても、反対者たちに脅かされることはない、と。そのことは、彼らにとっては滅びのしるし、あなたがたにとっては救いのしるしです。それは神によることです。

「脅かされることはない」というのは、ギリシア語においては「総崩れ、大敗走」ということです。もっと具体的には、馬が驚いて、制御できないほどどっと逃げ出すことを示しているそうです。ですから、私たちはいろいろなことが起こっても、「それでたじろいてはいけない」ということです。戦っている時に、堅くその戦線を守って、相手に背中を見せないということです。

そして、私たちがたじろくことがないことによって、「彼らにとっては滅びのしるし、あなたがたにとっては救いのしるし」とあります。福音に対する信仰生活を歩んでいるにあたって、知らなければいけない現実があります。それは、必ずしもすべての人が信じるわけではないのだ、ということです。イエス様が、種蒔きの喩えで語られたように、道端に種が落ちることもあるし、岩地、いばらのある土地もあるのです。ですから、福音を受け入れないという現実があります。そして、もっと厳しい現実があります。それは、心を頑なにしている人が、ますます頑なにするということです。ファラオのような状態です。ですから、自ら自分自身を滅びに定めていくようなことをしていきます。

けれども、「あなたがたにとっては救いのしるし」とあります。そうした戦いの中で、主が確実に、救いのみわざを前進していけます。自分たちが、神の救いの働きに入っている時は、反対や困難、問題がないところで進んでいくのではなく、まさに困難、苦しみ、反対の中で進んでいくということです。ネヘミヤ記を見ますと、エルサレムの再建の工事が完成した時に、こう書いてあります。「ネヘミヤ 6:16 私たちの敵がみなこれを聞いたとき、周囲の国々の民はみな恐れ、大いに面目を失った。この工事が私たちの神によってなされたことを知ったからである。」猛烈な攻撃があったのですが、神は、彼らの企みは無に帰し、主の大いなる救いが明らかにされます。

2B 苦しみの共有 29-30

²⁹ あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。

ここで、あまり聞かない神の約束があります。私たちがイエス様を信じることができたのは、神からの賜物です。これは、私たちはよく知っています。それだけでなく、「キリストのために苦しむこと」

も、恵みだと言うのです。私たちは生活の中で不都合なこと、試練や困難がありますと、それは神が自分を怒っているのだと勘違いしてしまうことがあります。いいえ、その正反対で神の恵みなのです。なぜか、キリストと交わりができるからです。「キリストの苦難にもあずかって(3:10)」とパウロは言っていますが、そこは、「キリストの苦難と交わって」とも訳せます。主はそこに恵みを置いておられます。

³⁰ かつて私について見て、今また私について聞いているのと同じ苦闘を、あなたがたは経験しているのです。

共に戦うことは、共に苦しむことを意味します。私たちは、共に戦うからこそ、同じ所で苦しみ、その痛みの共有の中で兄弟の絆が生まれます。「箴 17:17 友はどんなときにも愛するもの。兄弟は苦難を分け合うために生まれる。」パウロは、ピリピの人たちに、自分がピリピにいた時にシラスと共に鞭打たれ、牢に入れられたことを思い出させています。そして、今、ローマにいて牢に入っています。これらの戦いが、遠くにいるパウロだけでなく、また使徒であるパウロだけでなく、あなたがたも同じように戦いをしているのだよ、という励ましと慰めです。

そしてここで使われている「苦闘」の言葉は、イエス様がゲッセマネの園で祈られていた時に使われています。「ルカ 22:44 イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。】」イエス様が苦しみ悶えられた、その苦しみは、ご自身の意志を父のそれに明け渡す苦しみ悶えです。主の御心のままに、と言うことのできるような、ご自分を捨てるまでの苦しみ悶えです。私たちが苦しんでいる時、戦っている時に、主はすでにその苦しみを経られました。したがって、主は私たちが弱い時、助けることができます。そしてその戦いにおいて、力を与えることがおできになります。